

名前の呼び方

落語の前座咄の代表的なものとして‘寿限無寿限無’がある。名前の長いことによって起るいらいらを笑いに包んでしまう古典落語のひとつである。では、実際日本人の名前で一番長い名は何だろう？ 聞いたところでは、「八月朔日千代」？さんという方だそうである。「ほづみちよ」と読む。外国人の場合、言語学的に複雑多岐に亘るからもっと大変だ。

シドニー・オリンピック水泳競技で、優勝候補だったイアン・ソープ選手を破って優勝したオランダのピーター・ファン・デン・ホーゲンバンド選手を呼称する時、姓のファン・デン・ホーゲンバンドと叫びながらも、ゴール間際のデッドヒートに実況放送が付いていけず、ついに「オランダ！オランダ！」と絶叫していたのが妙に頭にこびりついている。

露出度が高ければ何とか覚えることが出来るが、馴染みにくい外国名の発音の場合は、地名、人名を問わず日本人にとって覚えるのは大変である。最近では著名人でもイランのアフマディネジャド大統領のような記憶しにくい名前も表われてきた。

英語以外の外国語の場合は一旦英語に訳されて、英語名で日本に伝えられるケースが多く、なおさら厄介である。いま日本では基本的に原語発音を重視するようになり、検定教科書も基本的にそれに倣っている。かつての「アレキサンダー大王」は、「アレクサンドロス大王」となり、「ベニス」は「ヴェネチア」となった。

ある時パリのオルセー美術館でドガの名画を鑑賞していて、傍のアメリカ人グループが「ドガ」を「デガス」と発音しているのに耳をそばだてた。確かにドガの表記は‘DEGAS’であり、英語の発音上なるほど思ったが、まるで別人の印象に当惑したことがある。

しかし、まあ一番の傑作は、何と言っても東京メトロ「国会議事堂前」駅のローマ字名をフランス人に発音してもらった時である。「コッケイジジードモー」と流暢に発音した。

(近藤)